

Josephの「変化」—H. Fieldingの *Joseph Andrews*について

雲 島 悦 郎

Joseph Andrews (1742)の主人公は、plotの観点からすれば、間違いなく Joseph である。¹⁾ところが、Adamsの圧倒的な魅力のせいで、Josephの影は薄れ、いつしか Adams に主役の座を奪われてしまった観がある。²⁾ Joseph は、特に作品の出だし部分では、確かに魅力に乏しい人物である。一つには、Richardsonの*Pamela* (1740)のparodyとしての側面が色濃く出て、それが Joseph の描写に大きく影響したからである。いかにも淑徳の誉れ高き Pamela の弟らしく、誘惑する。Mrs. Booby に対し、“Madam,’ . . . ‘that Boy is the Brother of *Pamela*, and would be ashamed, that the Chastity of his Family, which is preserved in her, should be stained in him. . . .’”(I, viii)³⁾と言ったり、姉への手紙の中で、“. . . I hope I shall copy your Example, and that of *Joseph*, my Name’s-sake; and maintain my Virtue against all Temptations.”(I, x)と言ったりすると、実にわざとらしくて、付き合い切れないという感じを受ける。それに、恋愛物語の主人公として、その美貌ぶりがいやに誇張して描き出されるものだから、⁴⁾どうしても生身の人間としての存在感が薄れ、脆弱な印象が強まることになる。⁵⁾

しかし、Josephは終始一貫して、そのような存在としてとどまる訳ではない。作品を読み進むにつれ、徐々に生彩を放ってくるのも確かであり、⁶⁾人によっては、これを Joseph の成長・発達のあらわれと見たりする。⁷⁾ 成程、Joseph と Adams の関係を、テレマコスとメンートル (アテ

ネ)の関係とか、または *grand tour* に出掛ける貴族の子弟と付き添いの家庭教師との関係に重ね、旅に教育的効果を認める観点からすると、どうしてもこのような見方をして見たい誘惑にかられる。

また、一般に言われるように、人生という旅の艱難辛苦が人を鍛え、成長させるとするなら、Josephにはそのような条件が十分そろっていた。彼は、未亡人になって一週間ばかりの Mrs. Booby の誘惑を拒否したばかりに、暇を出されてロンドンの屋敷を発たなければならなくなったのが、そもそも苦勞の始まりで、それから田舎に帰り着くまでは苦難の連続であった。やっと田舎にたどり着き、待ち望んだ Fanny との結婚にこぎ着けたかと思えば、Mrs. Booby 達の妨害や、更に自分と Fanny が実は血のつながった兄妹だといった思いもかけぬ誤情報に苦しめられる。Joseph は、これらの難儀を全て、辛抱強く乗り越えたのだから、これらの経験は後に何らかの好結果をもたらすだろう、といった見方はできる。そういう意味での旅の教育効果は否めないにしても、果して、ほんの短期間——旅だけならば、11日間であるし、⁸⁾ Mrs. Booby の誘惑が始まってから結婚に至るまでも20日足らず——のうちに、急に目に見えて彼が成長を遂げたと主張できるだけの説明材料がそろっているだろうか。本論は、結論的には、Josephにおける見た目の変化は認めるけれど、それが彼の成長・進歩によるものだという見方に対しては否定的な立場をとらざるを得ない。

Tom Jones (1749) の Tom や *Amelia* (1751) の Booth の場合を考えて見ると、彼等の成長の共通点は、特に“prudence”の重要性を学んだことである。それは、彼等の蒙った災難の多くが、彼等自身の無分別による所が大であったからである。Joseph の場合、これと比較してどうであろうか。

Joseph の無分別らしきものという、強いてあげれば一つあるように思う。それは、彼が解雇された日の夜中に、一刻も早く Fanny に会いたい一心で、たった一人で旅に立ち、その途中で追い剥ぎに襲われ、身ぐるみ剝がれた上に、半殺しの目に会うことである。しかし、夕方になって、突如暇を出され、一刻の猶予もならずという Mrs. Booby の厳命で追い立てられ

るように屋敷を出たし、懐具合も寂しかったから、宿泊費を節約するためにも、夜中に旅立ったのもわからないことではない。彼は親孝行で、年8ポンドの手当ての半分を両親に仕送りしていたので、自分の欲しい楽器を買うために、執事の Pounce から50%以上の高利子で給金の「前借り」をしていたから、解雇の時点で、手元に残った金はほんの僅かであったのだ。

それに、昼間に旅をしようとも、また大勢で旅をしようとも、追い剥ぎに襲われない保証のない物騒な世の中であったのだ。また、この作品における他の旅立ちや道中の時間も、圧倒的に夜間が多いことを考えると、⁹⁾ Joseph が特に無分別であったとは必ずしも言えない。

“prudence” (又は “imprudence”) は “passion” と密接な関係があると考えられている。感情に流されることは無分別の一つだからである。¹⁰⁾ すると、Joseph が Fanny に対する 熱い思いという “passion” の虜になっているのは、紛れもない事実であり、そして、その点で彼は何度も Adams にたしなめられるから、¹¹⁾ その限りでは、Joseph に関し “prudence” が問題になっていないこともない。その典型的な例が、ある地主の差しがねで、数人の暴漢によって、Fanny が Joseph 達の元から強引に連れ去られた時である。最愛の恋人を拉致されて悲嘆にくれる Joseph に対し、Adams は過度の感情に流されることの非を諄々とさとし、何事も神のおぼしめしと書いて諦めるように説く。しかし、この場合どちらかと言うと、心ある人間ならば、いかに学を積んでいようとも、¹²⁾ 最愛の者を失えば、しばらくの間は、極度の嘆きに陥っても、それが当然であり、Adams の説教は理屈としては、あなたが間違いでないにしても、あの場では実行不可能な無理な注文であったという主張が読み取れる。¹³⁾ そして、それは Adams 自身がこの後で、最愛の末息子が溺死したという誤った情報に、半狂乱の態に陥ることによって証明して見せる。

こういう風に見ると、“prudence” は Joseph の修得すべき徳として、余り強く意識されていないとも言える。それどころか、むしろ Joseph は、年の割には落ち着きがあり、大体において、どういう場でも的確な判断ので

きる人物として描かれている。¹⁴⁾ というのも、Adamsが非常にドン・キホーテ的な人物で、古典をはじめとする書物の中の世界を現実の世界と錯視し、そのために現実世界には幼な子の如く疎いのに対し、¹⁵⁾ Josephは結構世情に詳しく、いい意味でAdamsの足を現実の地につけさせる役目を担っていると言える。¹⁶⁾ かくして、Adamsは往々にして、負うた子に浅瀬を教えられているような趣きを呈することになる。

大体JAではAdamsと或る居酒屋の主人との議論に代表されるように、学問的知識と世間知の関係が大きく取り上げられている。¹⁷⁾ Adamsは、純粋な学問的知識はあるが、既に述べたように世間知は皆無に近く、例えばPounceに面と向って、“... but these are things perhaps which you, who do not the World—” (III, xiii)と馬鹿にされたりするが、一方Josephは、“... it is as plain as Daylight to those who converse in the World, as I have done these three Years.” (III, vi)と世間知に自信の程を示すし、実際それだけのものは持っている。しかし、世間を知ることとは無条件に良い訳ではない。AdamsとJosephのあのpublic education対private educationの形をとった教育論議も、つまるところ若者にとっての世間に出ることの意味が問われている。そして、忘れてならないのは、Josephはそれまで一年近く、世間の縮図とも言うべきロンドンに滞在していたことである。¹⁸⁾

ロンドンは、Josephの言葉にもあるように、¹⁹⁾ 隣の住人同士がお互いを知らないような人間関係の疎遠な世界であり、先ず何よりも悪の温床である。であるが故に、TomやBoothにとってもロンドンは(反面的)教育の仕上げの場であった。そしてTomやBoothの場合と違って、Josephはある程度都会の悪影響を受けたとは言え、身を持ち崩すことはなかった。それでも、音楽に打ち込んだために、オペラ劇場に行けば仲間のリーダー格であったし、直接、間接にも世間の裏面に通じていった。この段階のJosephが以前の彼と、どのように他者の目に変って映ったかを知るために、Mrs. Boobyの意見を引用しておこう。

His Lady, who had often said of him that *Joey* was the handsomest and genteelest Footman in the Kingdom, but it was pity he wanted Spirit, began now to find that Fault no longer; on the contrary, she was frequently heard to cry out, *Aye, there is some Life in this Fellow*. She plainly saw the Effects which Town-Air hath on the soberest Constitutions. (I, iv)

このように、Joseph は既にこの段階で、人の目には、以前とは違って覇気のある生き生きとした若者と映るようになっていたのである。

JA 中の三つの interpolated tales のうちの一つである、かの Wilson による自らの若かりし頃のロンドン生活の回顧談は、おおむね品行方正であった Joseph 自身の経験としては描けなかった、若者のたどる墮落の典型例を、本筋を補う形で作品に盛り込んだものと言える。²⁰⁾そして、これはロンドンにおける生活経験一般の影響力の重大性を物語ると共に、本人がしっかりしていなかったり、²¹⁾良き指導者に恵まれなかったりすると、Joseph もまかり間違えば Wilson と同じ運命をたどる可能性があったことを示唆しているし、後でわかるように、Wilson が Joseph の実の父親であったということは、この点でなかなか意味深長である。

Joseph には、相当の期間ロンドンにいながらも、身を持ち崩さないだけの分別があったとするならば、彼が他に学ばなければならないものとは一体何だろうか。それは、Tom や Booth の場合から判断しても、先ず信仰があげられなければならない。

Joseph は、分別や世間知と同様、ロンドンに出る前から、若いなりに既になかなかの信仰を持ち合わせていたと知らされている。そもそも Adams が Joseph に注目し出し、Joseph がロンドンに発つ時は何かと助言・忠告を行ったのも、元はと言えば、教会での礼拝時の Joseph の全く立派な振舞いにいたく感心したので、機会を見つけて Joseph に宗教に関して二、三質問し、その返事にとでも満足してからである。²²⁾そして、Joseph がロ

ンドンに出て、髪形などの点で、ある程度その悪風に染まりながらも、本質的に墮落しなかったのは、窮極的にはこの信仰のためであったという捉え方ができる。そして、この点でも Joseph は Tom や Booth とは大きく異なる。

彼の信仰の程度を証明するものは他にもある。Fielding の作品では、人が自分の死とか、又は身近な人の死に直面することによって、その信仰が試めされたり、また信仰のない者にとっては、死に臨んだことが転機となって回心が訪れることがよくある。Joseph も、追い剥ぎにやられた時の怪我を、例によって、手柄顔をしたい藪医者に命取りになる可能性のあるものと診断され、死に直面していると思ひ込む。その彼は、医者や Barnabus 牧師との対話や、その後の彼の独り言の内容から判断して、Fanny に対する思いとか、追い剥ぎに対するうらみを残しているという点で、彼の信仰は完璧ではないものの、神慮とか来世の存在を信じているという点で、作者の基準からすると、おおむね問題がないと言える。身近な人を亡くす訳ではないが、それに近い例として、前にも述べた Fanny の強奪された場合でも、同様に彼の態度は必ずしも信仰に反したものではなかった。

こう見てくると、Joseph は、いわゆる“Christian philosophy”という点では、Tom や Booth と比べると、既に早い段階で、はるかに出来上っていたと判断してよい。²³⁾そして、人物的にこのように出来上っている所が、かえって青年としては面白味がなく、もっと問題も魅力もある Tom という人物を創造する理由にもなったように思われる。

Joseph が、ロンドンから田舎へと帰る旅の過程で成長していくと見る人達は、何よりも、Tom や Booth の物語は、彼等が田舎からロンドンに出るまでの道中と、ロンドンにおける生活が中心で、田舎に向けてロンドンを発つ所ではほぼ実質的に終るのに対し、Joseph の物語はこの帰路の部分为中心であって、その旅の意味も自ずと違うことを忘れていたようだ。Tom や Booth が旅の試練を経て知や信仰の重要性を学んでいくのに対し、

Adams や Joseph は旅の試練の中で、既に身にそなわった徳を光り輝やかせるのである。

しかし Joseph の役割はこれだけではない。Joseph の物足りなさとして、最初の頃の脆弱な感じをあげたが、実は、これは一種の錯覚であって、彼の美貌や貞操観念の堅さと同時に、Beau Didapper を典型とする伊達男との対照で、Joseph の男性としてのたくましさや、それに男性としての欲望もしばしばふれられる。²⁴⁾ 特に Fanny との consummation をあせる彼の気持は、数々の場面からはっきり読み取れる。²⁵⁾

Adams が結局何の変化もしない人物であるように、その好一対である Joseph も、ロンドンを発つ時には、若いながらも、その人格はほぼ定まり、本質的には変化しないと考えた方が良さそうである。²⁶⁾ では、その彼が変化したように見えるとしたら、その原因は一体何であろうか。

先ず第一に考えられることは、特に最初の頃、JA が Pamela の parody としてはめられた桎梏が、Joseph の自由を束縛する形になり、彼の本質が十分に出なかった——または、そのような若者を描く作者の筆力が存分に発揮されなかった——ためと考えられる。そして、Joseph は、従僕の任務を解かれて Booby 家を出ると共に、Pamela の弟としての役割も弱まり、旅の解放された（開放的）雰囲気の中に出るや、俄然とその持ち味を發揮し始めると考えられる。

これに付随して、今一つ理由があげられる。Joseph の変化とおぼしきものが認められるのは、主として Adams との関係においてであるから、それは両者の交わりの中に求められ、しかも Adams の側に帰せられるものである。という、それは他でもない、彼の “goodness” と堅く結びついた “simplicity” なのである。

Adams は英国小説の登場人物の中でも、類まれな喜劇的人物と評価されるが、²⁷⁾ 彼に出会う最初からそう感じるのではない。初めから世間知らずとは知らされているが、それが彼の滑稽さにつながるとは思わず、また彼の純朴さや気さくさより、むしろ、その学殖の豊かさや、教区民に与え

ている信頼感とか、彼等に対する權威の方が、どちらかと言うと強く印象に残る。だから、こんな Adams は、Joseph にとって先ず何よりも尊敬すべき人物であったと考えるべきである。Joseph が“chastity”を大事にするのも——Fanny という恋人がいるからでもあるが²⁸⁾——姉 Pamela の手本と同時に、実は Adams の生き方からも学んだからである。²⁹⁾ Adams が教区民から父親のように慕われていると言っても、若い Joseph には先ず第一に威厳のある存在と映っていたととった方が自然である。そして、Adams が読者に対し旅の過程で次第にその持ち前の“simplicity”を余す所なく見せるのと同様に、Joseph に対しても共に旅をする中で彼の全体像を徐々にあらわしていくと考えられる。そのために、Joseph どころか Adams さえも変化していくように見えるのである。

そして、実際この Adams が、怪我をした Joseph の泊っている宿に「久々に」姿を現わした時の様子は次の如くである。

It was now the Dusk of the Evening, when a grave Person rode into the Inn, and committing his Horse to the Hostler, went directly into the Kitchin, and having calld for a Pipe of Tobacco, took his place by the Fire-side; . . . (I, xiv)

これが Adams だということは、後半部分で一応見当がつくけれど、しかしここでは威厳が表に出て、後で顕著になる滑稽な Adams とはなかなか結びつかない。そして、これに近い image が、弱冠 21才の Joseph にとっては、今も変わらぬ Adams のそれであったと考えた方がよさそうである。

ここで二人は再会し、Adams は Joseph に色々と尋ねた上で、Joseph の怪我は命に別状はなく、ただ医師が治ったのを自分の手柄にしたいために大袈裟な見立てをただけだと見抜くあたりは、のちの Adams には考えられない程の判断力を示しており、実に頼り甲斐があるように見える。しかし、この後から彼は次第に自らの本領を発揮してくる。³⁰⁾ それは、彼が普段住んでいる教区とは違った広い世界に出て様々な人間と接触したり、

様々な状況におかれたりするからだと考えられる。そして、Adamsが“simplicity”をあらわにするにつれて、それに誘われ、その弱点を補い、また時にはそれに反発する形で、Josephの持ち味も徐々に出てくる訳である。

Adamsの特性たる“simplicity”の中でも、³⁰⁾本論では、彼が間違ったprideを否定し、人の差別を認めない点に注目したい。この点で、“simplicity”は、人のことも自分のことのように思うような“goodness”と切っても切れない関係にある。

彼は年収わずか23ポンドで妻子7人をかかえた貧乏牧師補 (curate) である。³²⁾ 彼がこのように貧しさに甘んじている点も彼の“simple”な一面と言えよう。しかし、たとえ貧しくとも、聖職者としての自らの権限を確信する彼は、Joseph達の結婚式の最中に、不謹慎な笑い声をたてたBooby若夫妻 (Mrs. Boobyの甥とPamelaで、Adamsよりも目上) を、皆の面前で叱責する。その時の彼の言い分は、“... Mr. Adams at Church with his Surplice on, and Mr. Adams without that Ornament, in any other place, were two different Persons.” (IV, xvi) という内容である。³³⁾ 彼は権限を行使する場をわきまえているが故に、他者が場違いな権力を揮おうとする時は、たとえ相手がMrs. Boobyであって、逆えばおのれの職を失うおそれがあるとも、敢然と楯を突く人間であることは、彼がMrs. Boobyの意向に従わず、JosephとFannyをあくまで結婚させようとした所にもあらわれている。

権力の濫用をいましめるAdamsは、常に目下の者とも近しく付きあおうとする。³⁴⁾ 彼はただ人に親切であるだけではなく、相手を自分と等しく扱う。対等に分ち合おうとするのである。旅の途中でJosephとめぐり会った時でも、Josephが無一文だと知ると、自分の乏しい金をいくらでも使うように言い、実際に二人分の支払いを済ませた後に残った一シリングの金を等分する。³⁵⁾ 同じようなことは全く見知らぬ人との間でも起こる。ある居酒屋で、たまたま会った人物 (実は正体を隠したカトリック教徒) に、

その店の飲食代金の支払いのための18ペンスを無心されると、Adamsは、Wilsonの善意で手元にあるはずだった半ギニーを折半しようと言い出す程である。³⁶⁾

これは金銭に限ったことではない。Adamsは、Josephの指摘で、出版するつもりだった肝心の説教集を忘れて来たことに気付くと、ロンドンに行くのを断念し、Josephと一緒に田舎に帰る決意をするが、自分の乗って来た馬を“ride and tie”の方法で、二人が共同で利用することを気軽に提案し、しかも、Josephの怪我が癒えたばかりとは言え、Josephを先に乗せる。これは、ある種の人達にとっては信じ難いことであるはずだ。

大体、AdamsとJosephは、実際の主従関係はなくとも、一般にそれに近いと受けとられる関係にある。それを示すかのように、この二人は、一方の法衣ともう一方のお仕着せのせいもあって、二度ばかり主人と召使いの間柄と間違えられ、その親密さを怪しまれたりする。³⁷⁾

それに聖職にある者は、当然徒歩ではなく、馬にまたがるべきだという考え方もある。³⁸⁾ それ故、Adamsがある時、当然金を貸してくれるものと期待して行った同じ牧師補のTrulliberは、先ずAdamsの姿を見て、客間に通すつもりだったのを止めて、台所に通す。³⁹⁾ そして、Adamsが法衣を着けていながら、乗馬靴を履いていないのをいぶかる。

この後でも、AdamsはJosephが足をいためているという理由で、Josephを馬車に乗せると、自分はそれですっかり安心して、乗るはずの馬に乗ることも忘れ、すたこら歩き出す。Josephがそのような礼儀知らずな真似はできないと断ったにもかかわらずである。⁴⁰⁾ 大体において、Adamsはなかなか馬車というものに乗ろうとしない。それは、“‘If I walked alone,’ says he [Adams], ‘I would wage a Shilling, that the *Pedestrian* out-stripped the *Equestrian* Traveller: . . .’”(III, xii) とあるように、彼は馬車にも負けないほど健脚を誇っているためでもあるが、馬車などに乗るより歩行を好む彼の“simplicity”のせいでもある。

Josephは最後までAdamsに対する敬意を失わないが、Adamsが上に

述べたように、極く自然に作り出す対等な雰囲気の中で、次第に遠慮もとれて、潑刺たる言動をするようになると解釈される。⁴¹⁾そして、これまた Adams の “simplicity” の一つである迂濶さが、Joseph に積極的な言動の機会を与え、こういう情況に拍車を加えている。そして、それがために Joseph は成長したように見えると考えられる。

Adams はしばしば Joseph に意見を求める。Joseph の方は最初の頃は、大体遠慮して、“‘It is not for me,’ . . . ‘to give Reasons for what Men do, to a Gentleman of your Learning.’”(II, xvi) とか、“‘It doth not become me,’ . . . ‘to dispute any thing, Sir, with you, especially a matter of this kind; . . .’”(III, v) などと前置きするのを忘れない。これに対し、Adams は、議論が熱してくるといささか気色ばんで Joseph をあわてさせることもあるが、彼の態度は決して高圧的ではない。Adams は学問的知識だけではなく、“‘. . . You are a young Man, and can know but little of this World; I am older, and have seen a great deal. . . .’”(IV, viii) という具合に、世間知まで自分の方が上だと思っているので、つつい “‘it doth not become green Heads to advise grey Hairs—’”(IV, viii) などという感情的な言葉も口をついて出るが、しかし決して Joseph の発言を封じるつもりはない。それ故、Joseph は求められなくとも Adams に対していつしか適切な助言を行っているし、Adams は Adams で、素直にそれを受け入れている。

例えば、Fanny を伴って三人で暗闇の中を歩いている時、羊泥棒を、その物音・気配で人殺しと勘違いするが、Adams は自分達の身に危険が迫ったことを知ると、怯まず敵のいる方に向かって行こうとするけれど、Joseph が Fanny の身を案じて、闇に乗じて逃げることを提案すると、Adams は直ぐ受け入れる。その直後、三人が川土手にさしかかると、Adams はただ泳いで渡ることしか思いつかないが、Joseph が周囲の情況から、近くに橋があると判断して、その旨を告げると、Adams は“‘Odso, that’s true indeed,’ . . . ‘I did not think of that.’”(III, ii) と自分の考えの足り

なさを率直に認め、Josephの意見に従う。又、Wilsonの家に泊った翌日、近くの地主が、理不尽にもこの家の娘の可愛がっていた小犬を撃ち殺したと聞いた時、AdamsはJosephの制止がなかったら、棍棒をもって一目散にこの卑劣漢の後を追うところだった。そして、Wilsonの家を出てから、ある景勝の地にさしかかると、Josephの提案で休息をとることになるが、Wilson家の厚意の弁当を開くと、中から金包みが出てくる。この時もAdamsは何かの間違いで、これが紛れ込んだものと早合点するが、Josephの説明で、これ又Wilsonの厚意によるものと納得させられる。ここでの食事の後、Josephはいよいよ調子に乗ってきて、AdamsとFannyを前にして、“charity”について滔々と弁じててる。もっともこの時は、Adamsはすっかり寝入っていて、最初から最後まで何も聞いていなかったという落ちがついている。

このように、のびのびと振舞い出したJosephは、例のFanny強奪事件の時は、Adamsの説教にいささかながら不満をもらすし、またAdamsの息子の溺死騒ぎの時になると、Adamsの自己矛盾をとがめる程である。それというのも、その騒ぎの直前にも、AdamsはJosephに対し、過度の感情を慎むように説教しておきながら、自分はいざという時それが実行できなかつたばかりか、騒ぎがおさまると、先程の自分の行動を忘れたかのように、平然とJosephを傍に呼んで、同じ内容の説教を再開するものだから、Josephもついに勘忍袋の緒が切れたのである。

ここまでJosephが自己主張できるのも、Adamsの人徳のお蔭である。そして、上に述べたJosephの諸々の言動も、旅の過程でのJosephの成長のあらわれなどではなくて、Adamsと共に行動したことによって、既にそなわったものが当然の如く出ただけである。それに成長のあらわれという程大したものではなく、極く常識的な判断に過ぎない。しかし、くれぐれも断っておきたいのは、彼のこの旅の経験が何の役にもたたないとは決して言っていないということである。ロンドン在住の間のもも含めて、彼の結婚に至るまでの諸々の経験が、その後には生かされるからこそ、後日

談にもあるように、彼等は平穩無事な生活を送ることができるのである。

最後に、Adams と Joseph 達との間に見られる親密さとの関連で、階級差別の問題にふれておく。

Fielding は、いろいろな作品の中で、語り手や登場人物の口を通じて、階級が違くと種 (species) まで違うかのように他の階級の者を扱う輩の愚劣をきびしく非難するが、JA でもそれは同じである。⁴²⁾

JA では、Booby 夫妻をはじめとして、その家に仕える執事の Pounce や、更には侍女の Slipslop まで、この種の傾向を顕著に示す。⁴³⁾ Mrs. Booby などは、教区民を獣 (“*The Brutes*”) 呼ばわりするほど傲慢不遜である。Slipslop の階級意識は、嫉妬ゆえに自らが屋敷を追い出したかつての部下 Fanny に久し振りに会った時、まるで知らぬ者かのように無視する形であられる。金の亡者 Pounce は、Adams を自分の馬車に乗せた時、Adams のむき苦しい服装ゆえに彼に平然と侮辱的な言葉をあびせるので、Adams は馬車を跳びおりることによって、毅然とそのような扱いを拒む。

馬車と言えば、Fielding は駅馬車などに乗り合わせた者など、旅の同行者に、社会の縮図的なものを見る。道端の溝の中でうめいている Joseph を発見した駅馬車の客達の対応の仕方は、社会一般のそれを代表していると言える。別の馬車では、召使い風情の Joseph との同乗を頑として拒む淑女気取りの女 (prude) がいるが、この手の女性は同行者の間のなごやかな雰囲気を損う典型人としてしばしば Fielding の作品に登場する。

JA は *Pamela* の parody であることから、主人公が召使いの身分になったことと、その同伴者に貧乏牧師の Adams が選ばれたことで、まるで糞の山から出た者 (“*Autokopros*”) ⁴⁴⁾ でもあるかのように上流人に蔑まれる下層の人間の裸の輝きや、⁴⁵⁾ その気概を示すと共に、⁴⁶⁾ 虚飾に包まれた諸々の人間の实態を暴露するのに最も格好の場を提供したと言えよう。こういう階級問題の観点から見ると、JA は、*TJ* や *Amelia* よりもはるかに痛快な作品となっている。

[注]

- 1) “That agreeable young man, Joseph, may be the centre of the plot; but it is the ‘old foolish parson’ that is the centre of interest.” (F. Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* [Archon Books, 1966], I, 354). なお、この中の“old foolish parson”という言葉を使ったのは Mrs. Booby である (IV, ix)。
- 2) Dick Taylor, Jr. も指摘するように、従来多くの批評家が、躊躇なく Adams を JA の実質的な主人公と見ている (“Joseph as Hero in *Joseph Andrews*, *Tulane Studies in English*, VII [1957], 91, n. 1)。しかし、Taylor は敢えて、Josephこそ真の主人公と主張する。けれど、Robert Alan Donovan などはこれに否定的である。See Robert Alan Donovan, *The Shaping Vision: Imagination in the English Novel from Defoe to Dickens* (Cornell U. P., 1966), n. 5 to ch. IV.
- 3) 本論における作品からの引用は全て、*Joseph Andrews*, ed. Martin C. Battestin (Wesleyan U. P., 1967) による。引用文の後ろの () 内の数字は、それぞれ巻と章を示す。
- 4) Fanny と類似した Joseph の女性的な美については、Sean Shesgreen の見解が参考になる。See Sean Shesgreen, *Literary Portraits in the Novels of Henry Fielding* (Northern Illinois U. P., 1972), pp. 78ff. Joseph と Fanny のこの容貌の類似性を、Leo Braudy はやや別の角度から問題にしている。See Leo Braudy, *Narrative Form in History and Fiction* (Princeton U. P., 1970), pp. 102-3.
- 5) Joseph が Fanny のことを思って発する、“... If Heaven would have indulged thee to my Arms, the poorest, humblest State would have been a Paradise; I could have lived with thee in the lowest Cottage, without envying the Palaces, the Dainties, or the Riches of any Man breathing” (I, xiii) は、面白いことに *Amelia* で女性の *Amelia* が口にする科白と良く似ている。
- 6) Joseph が生彩を放ってくると言っても、決して過大評価する訳ではない。だから彼の全体的評価としては Michael Irwin の “As a model youth, first idealistically and then realistically, he tends to be a rather colourless figure, though this normality if anything serves to heighten the general plausibility of the characterization.” (Michael Irwin, *Henry Fielding: The Tentative Realist* [Clarendon Press, 1967], p. 75) もあながち不当だとは思わない。
- 7) このような見方の代表者は Dick Taylor, Jr. であり、彼は前掲論文において、“change” とか “growth” の他に、次のように “development” とか “maturity” を使って説明する。

Whatever his original plan for Joseph was, in the actual fabric of the novel he describes in Joseph a noticeable and sympathetic change and development of character into maturity. (*op. cit.*, p. 109)

しかし、程度の差こそあれ、Taylor と同じような見方をする学者は結構いる。例えば、Aurèriel Digeon は、“The Joseph who, at the beginning of the novel, wrote such timid letters to his sister, is far removed from this

- Joseph, who dares to resist Parson Adams, when his own interest is at stake. The boy of the earlier episodes has become a man. A few weeks of life on the roads have sufficed to develop him.” (*The Novels of Fielding* [Russell & Russell, 1962], pp. 55-56) と言って、Joseph の変化・成長を認める。また、Maurice Johnson も、“Though he remains deferential to Adams, Joseph deepens in character, readily asserts himself both verbally and with his fists, and assumes leadership in much of the action.” (Maurice Johnson, *Fielding's Art of Fiction* [Univ. of Pennsylvania Pr., 1961], p. 55) と、同様の見解をとる。
- 8) 旅の日数等に関しては、Dudden の time-scheme を参照 (*op. cit.*, pp. 344ff.)。Wilbur L. Cross は旅の期間を 8 日間と計算している。See Wilbur L. Cross, *The History of Henry Fielding* (Russell & Russell, 1963), I, 318.
- 9) Adams と Fanny も夜中 (朝一時) に旅立つし (II, xii), Mrs. Slipslop の乗った馬車も月の皎々と照る時刻に出る (II, xiii)。Adams と Joseph と Fanny は、居酒屋を発って何マイルも行かぬうちに夜になるので、暗闇の中を進んで行かなければならないし (III, ii), 同じく三人は暗くなってから、ある屋敷を出発する (III, viii)。
- 10) *Amelia* にはこの理屈がはっきり読み取れる。
少し別の角度からも同じようなことが言える。Joseph にとって、“chastity” とは広く感情一般の抑制という意味もあるという。See Martin C. Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art: A Study of "Joseph Andrews"* (Wesleyan U. P., 1959), pp. 113, 116. とすると、“chastity” が大きく取りあげられているということは、やはり“prudence”が問題になっているということになる。しかし、その程度は別問題である。
- 11) 次のように、Adams は、Joseph に限らず、誰に対しても、先ず第一に感情の克服を説くのである。
“... [Adams] was a great Enemy to the Passions, and preached nothing more than the Conquest of them by Reason and Grace...” (VI, viii)
- 12) “‘You cannot imagine, my good Child, that I entirely blame these first Agonies of your Grief; for, when Misfortunes attack us by Surprize, it must require infinitely more Learning than you are master of to resist them: . . .’” (III, xi)
- 13) 作者はこれによって stoicism の弱点を指摘していると考えられる。See Battestin, *op. cit.*, p. 67.
- 14) Cf. “... his [Wilson's] life displays a series of perils which Joseph — prudent, devout, rustic—need not encounter.” (Irvin Ehrenpreis, “Fielding's Use of Fiction: The Autonomy of *Joseph Andrews*,” *Twelve Original Essays on Great English Novels*, ed. Charles Shapiro (Wayne State U. P., 1960), p. 35.
- 15) “He was . . . as entirely ignorant of the Ways of this World as an Infant just entered into it could possibly be.” (*JA*, I, iii).
- 16) 守る気もない約束をして、人のかついで喜ぶ或る「紳士」の嘘を、Joseph がいち早く見抜くのは (II, xvi), 明らかにロンドンでの経験が物を言っている。Cf.

“But Joseph’s experience as a London servant clearly gives him much more insight into the “promiser” than any of Adam’s precepts.” (Braudy, *op. cit.*, p. 107).

JAにはSancho Panzaに相当する人物はいないと言われるが(See Andrew Wright, *Henry Fielding: Mask and Feast* [Chatto & Windus, 1968], p. 29), いい意味でJosephがその役割を果している。Cf. Sheridan Baker, “Fielding’s Comic Epic-in-Prose Romances Again,” *PQ*, LVIII (1979), 75: “. . . we should see in the foreground Don Quixote, idealistic, learned, right and ignorant of the world, in his perpetual tutorial role to Sancho, the realist, who learns from his tutor and eventually tutors him, just as Joseph does Adams.”

- 17) 世間知に関しては、本文で述べた以外に、例えばSlipslopについて、“[Slipslop] always insisted on a Deference to be paid to her Understanding, as she had been frequently at *London*, and knew more of the World than a Country Parson could pretend to.” (I, iii)とある。
- 18) “. . . a little before the Journey to *London*, she [Fanny] had been discarded by Mrs. Slipslop. . .” (I, xi)と、“. . . so fond a Pair should during a Twelve-month’s Absence never converse with one another. . .” (I, xi)から判断したもの。しかし、Josephの言葉、“. . . I have [conversed in the World] these three Years.” (III, vi)が少々気になる。Cf. Dudden, *op. cit.*, I, 352-3, n. 8.
- 19) “. . . *London* is a bad Place, and there is so little good Fellowship, that next-door Neighbours don’t know one another. . . .” (I, vi).
- 20) BattestinやCrossは、むしろWilsonの経験談はロンドンへの途上で引っ返したAdamsがそこで直接見聞できなかったところを補っていると考える。See Battestin, *op. cit.*, pp. 119-20; Cross, *op. cit.*, p. 130.
- 21) Josephは、“. . . if he [the Lad] be of a righteous Temper, you trust him to *London*, or wherever else you please, he will be in no danger of being corrupted. . . .” (III, v)と言うが、これは彼自身についても言えることであり、彼の自信を裏付けるものである。
- 22) JA, I, ii. この直ぐ後でまた同じ事実によつて、“It was this Gentleman, who, having, as I have said, observed the singular Devotion of young *Andrews*, had found means to question him. . . .” (I, iii)と言っているが、Josephの信仰の程度という点で、特に“singular Devotion”という表現に注目したい。
- 23) 拙論「Boothの‘philosophy’と‘Christian philosophy’—*Amelia*について」『下関市立大学論集』第27巻 第3号 1-28頁 参照。
- 24) E. g., “. . . I had once almost forgotten every word Parson *Adams* had ever said to me. . . .” (I, x).
- 25) Dick Taylor, Jr.は、この点で、Josephの歌う、StrephonとChloeについての歌を相当重要視する(Taylor, *op. cit.*, pp. 93-97)。
- 26) Maynard Mackは、優れた喜劇的人物は本質的には変化しないと言う。See “*Joseph Andrews and Pamela*” (Editor’s title), Introduction to Maynard Mack’s edition of *Joseph Andrews* (Holt, Rinehart and Winston, 1948), in

Fielding: A Collection of Critical Essays, ed. Ronald Paulson (Prentice-Hall, 1962), pp 57-58.

Cf. "...Fielding's characters are in some senses 'flat' and in others 'round'." (Wright, *op. cit.*, p. 150).

- 27) 周知のように、J. B. Priestley, *The English Comic Characters* (The Bodley Head, 1925)に、代表的な喜劇的人物の一人としてのっている。
- 28) Digeonはこの点に関し、"I am not quite certain this would have been Fielding's view. . . ." (Digeon, *op. cit.*, p. 53, n. 1)と注をつけている。
- 29) JosephはPamela宛ての手紙の中で、"Mr. Adams hath often told me, that Chastity is as great a Virtue in a Man as in a Woman. He says he never knew any more than his Wife, and I shall endeavour to follow his Example. Indeed, it is owing entirely to his excellent Sermons and Advice, together with your Letters, that I have been to resist a Temptation. . . ." (I, x)と述べる。
- 30) Cf. "There is an instructive contrast between the way Adams is conceived in this sketch and how he is realized in the plot. Abstract and theoretical, the description of the parson is remote and lifeless. Moreover, it is misleading to describe him as "a Man of good Sense." But thrust into the action of the novel, Adams far exceeds the expectations of his prosaic depiction. . . ." (Shesgreen, *op. cit.*, p. 91). なお "this sketch" とは、"Mr. Abraham Adams was an excellent Scholar. He was a perfect Master of the Greek and Latin Language; . . . He was besides a Man of good Sense, good Parts, and good Nature; . . ." (I, iii)と続く部分。
- 31) Andrew Wrightは、Dr. Johnsonの "simplicity" の定義を参考にしながら、Adamsの "simplicity" を論じている (Wright, *op. cit.*, pp. 152-157)。
- 32) 下級聖職者の貧窮状態については、Battestin, *op. cit.*, pp. 130-149を参照のこと。
- 33) Adamsのこのような点に関し、Duddenは "In doctrine he was a latitudinarian. . . In practice, however, he was something of a high churchman." (Dudden, *op. cit.*, I, 357)と言う。
- 34) これを示す部分としては次のようなものがある。
 . . . she [*Betty*] observed a very great Familiarity between the Gentleman [*Adams*] and him [*Joseph*]; and . . . she was certain they were intimate Acquaintance, if not Relations. (I, xiv)
 The Gentleman expressed great Delight in the hearty and cheerful Behaviour of *Adams*; and particularly in the Familiarity with which he conversed with *Joseph* and *Fanny*, whom he often called his Children . . . (II, xvi)
- 35) *JA*, II, ii.
- 36) *JA*, III, viii
- 37) ". . . [*Wilson*], conceiving that the Cassock, which having fallen down, appeared under *Adams*'s Great-Coat, and the shabby Livery on *Joseph Andrews*, did not well suit with the Familiarity between them, began to entertain some suspicions, not much to their Advantage: . . ." (III, ii).

- “...he told him...that he had endeavoured all he could to prevent it, the Moment he was acquainted with his Cloth, and greatly commended the Courage of his Servant; for so he imagined *Joseph* to be.” (III, vi)
- 38) “...[*Trulliber*] asked her [his Wife] ‘if Parsons used to travel without Horses?’ adding, ‘he supposed the Gentleman [*Adams*] had none by his having no Boots, on.’ ‘Yes, Sir, yes,’ says *Adams*, ‘I have a Horse, but I have left him behind me.’ ‘I am glad to hear you have one,’ says *Trulliber*; ‘for I assure you, I don’t love to see Clergymen on foot; it is not seemly nor suiting the Dignity of the Cloth.’ (II, xiv).
- 39) この他に, *Adams* は, その服装ゆえに, *Booby* 家の正規の食卓には着かせてもらえず, 専ら台所に通されているが (II, viii), 結構それに甘んじている。台所は *Adams* の “simplicity” を象徴しているようにも見える。
- 40) *JA*, II, iii; II, vii.
- 41) しかし, *Fanny* のことでは, 随分早い段階で *Adams* と激しい口論をする事実もない訳ではない (II, xvi)。
- 42) 語り手は階級差別にふれて, “...it is sufficient, that so far from looking on each other as Brethren in the Christian Language, they seem scarce to regard each other as of the same Species. This the Terms *Strange Persons*, *People one does not know*, *the Creature*, *Wretches*, *Beasts*, *Brutes*, and many other appellations evidently demonstrate;...” (II, xiii) と言う。
- 43) *Booby* 夫妻の教区民に対する態度は, “...For Sir Thomas was too apt to estimate Men merely by their Dress, or Fortune; and my Lady was a Woman of Gaity, who had been bless’d with a Town-Education, and never spoke of any of her Country Neighbours, by any other Appellation than that of *The Brutes*. The both regarded the Curate as a kind of Domestic only, belonging to the Parson of the Parish...” (I, iii) によく出ている。
因みに, *Slipslop* が *Fanny* を無視した所は, “... that high Woman would not return her Curt’sie; but casting her Eyes another way, immediately withdrew into another Room, muttering as she went, she wondered *who the Creature was*.” (II, xii) と描写されている。
- また, *Mrs. Booby* は, からかい半分で訪れた *Adams* の家族を指して, *Beau Didapper* に向って, “ ‘*Quelle Bête! Quel Animal!*’ ” (IV, ix) とフランス語で侮辱的な言葉を発する。
- 一方, *Joseph* や *Adams* のように善良な人間の階級意識は, 例えば, 二人のあまりの親密さに対する *Wilson* の驚きへの次のような対応の中に読み取れる。
- Joseph* said, ‘he did not wonder the Gentleman was surprised to see one of Mr. *Adams*’s Character condescend to so much goodness with a poor Man.’ ‘Child,’ said *Adams*, ‘I should be ashamed of my Cloth, if I thought a poor Man, who is honest, below my notice or my familiarity. I know not how those who think otherwise, can profess themselves followers and servants of him who made no distinction, unless, peradventure, by preferring the Poor to the Rich...’ (III, ii)
- 44) “In *English*, sprung from a Dunghill.” (I, ii) と作者自身が注を施している。
- 45) 裸の輝きということでは, 床入り前の *Fanny* についての, “Undressing to her

was properly discovering, not putting off ornaments: For as all her Charms were the Gifts of Nature, she could divest herself of none." (IV, xvi) という表現が象徴的である。彼女達には, Adams の “. . . Who clothes you with Piety, Meekness, Humility, Charity, Patience, and all the other Christian Virtues? . . . ” (II, xvii) という比喩からも覗い知れるように, 徳こそ真の衣服なのである。For the meaning of nakedness in *JA*, see Mark Spilka, “Comic Resolution in Fielding’s *Joseph Andrews*,” *Fielding*, ed. Ronald Paulson (Prentice-Hall, 1962), pp. 62ff.

- 46) Joseph は自分と同じ職業に従事する者を, “Gentlemen in Livery” (III, vi) とか “Gentlemen of our Cloth” (III, vi) と呼んで, 一応の誇りを示している。

Cf. “It [*Joseph Andrews*] is a plea on behalf of the poor who are crushed by the world, of the simple and innocent, of a Joseph Andrews and a Parson Adams. Fielding shows us the world as the humble see it, from below . . . ” (Digeon, *op. cit.*, p. 86).